

## 木股知史先生のご退職によせて

日本語日本文学科教授 中 島 孝 幸

木股知史先生は、2019年10月に満68歳を迎えられ、2020年3月末をもって甲南大学文学部の教授を退任されます。先生は1975年3月に立命館大学文学部を卒業され、同年4月立命館大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程に入学、1979年3月に同修士課程を修了されました。同年4月立命館大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程に進学し、1982年3月に同課程を単位取得の上、満期退学されました。

甲南大学には1992年4月に助教授としてご着任になり、1995年4月からは教授として勤められ、現在まで28年にわたって甲南大学で教育と研究に当たって来られています。2012年4月には永年勤続による表彰（20年表彰）を受けています。

主な役職としては、2000年4月より2年間、甲南大学図書館長を務め、2011年4月から2年間は甲南大学大学院人文科学研究科長、2014年4月からの2年間は甲南大学文学部長をつとめ、図書館、研究科、学部の運営に貢献されました。人文科学研究科長時代には、大学院修士課程のコース制導入に取り組み、「専門探究コース」「多元教養コース」の2コース制をスタートさせ、多様な大学院生を受け入れる素地を築かれました。また、文学部長時代には、「ぶんたすプロジェクト」を創設し、学科の枠を超えた学びの展開を可能にされました。

先生は「日本文学概論」「日本文学史」「近代文学講読」「現代文学講読」「日本文学特殊講義」「国語科教材研究」等の専門教育科目を担当されるとともに、基礎共通科目（当初は広域副専攻科目）の「イメージと文化」を長年担当され、文学部以外の学生に対しても日本文学の面白さを熱心に説かれました。講義科目以外に、「基礎演習」での初年次教育、「演習」「研究演習」「卒業研究」を通じてのゼミ指導においても、き

め細かく丁寧に学生を導くことで、数多くの有為な卒業生を送り出しました。

先生のご研究は日本近代文学を対象とするもので、石川啄木、与謝野晶子など『明星』派の文学の研究、近代日本の象徴主義の研究、小品文というジャンルの研究、一九〇〇年代から一九二〇年代にかけての文学と美術の交流の研究など幅広い範囲にわたります。

『一握の砂／黄昏に／収穫 和歌文学大系77』（共著、明治書院、2004年4月）では担当された『一握の砂』の注釈・解説で2005年に岩手日報文学賞啄木賞を受賞されています。文学と美術の交流を対象とした研究『画文共鳴—『みだれ髪』から『月に吠える』へ』（2008年、岩波書店）で、博士(文学)の学位を取得されています。

先生はご自身の研究の傍ら、若い大学院生の教育、一般市民の啓蒙といった点にも精力的に取り組まれました。多くの若い研究者を組織して協働作業の成果として『近代日本の象徴主義』（2004年、おうふう）『明治大正小品選』（2006年、おうふう）を書籍として刊行し、また科研費によって回覧雑誌『密室』の翻刻を行うなど、ご自身の研究を進める一方で若い研究者に鍛錬と活躍の場を提供しました。

また、2017年夏には甲南大学で開催された教員免許状更新講習において講師を務め、「夏日漱石における文学と美術の交流」というテーマで、中学校・高校の国語教諭を対象に、分かりやすく緻密な論を展開し高い評価を得ました。先生の地域連携、社会貢献への積極的姿勢を示すものと言えるでしょう。

このように、先生は甲南大学文学部日本語日本文学科において28年間にわたり多大な貢献をされました。心より感謝申し上げます、今後のご健康とご活躍をお祈り申し上げます次第です。